

台風や集中豪雨が原因となって起きる災害

台風や集中豪雨が原因となって、様々な災害が起きます。河川が増水したり堤防が決壊したりして、洪水の起きる危険があります。また、大量の雨が短時間に降るため、がけ崩れや土石流などの土砂災害が起きる危険もあります。ここでは、台風や集中豪雨が原因となって起きる災害について、それぞれの内容や心得をまとめました。

水害

水害とはどのような災害か

一般には堤防の決壊や、河川の水が堤防を越えて起きる氾濫を洪水害と呼び、大雨などによって、河川の流量が異常に増加して起きます。外水氾濫ともいいます。

愛知県は、木曾川・庄内川・矢作川・豊川などの大河川が多く、国内最大の海拔ゼロメートル地帯を有するため、洪水の浸水想定区域は県土の約2割に及びます。短時間の激しい雨、極端な大雨の頻発化や台風の大型化などによって、これまで経験したことのない豪雨が毎年のように日本各地で発生しており、水害リスクが高まっています。

また近年では、降雨をスムーズに排水できずに起きる内水氾濫も発生しています。特に都市部では、下水道などの処理が追いつかずに水があふれる都市型水害の危険性が注目されています。



水害に対する心得

洪水の時は地下室・地下街からすぐに避難する

- ・停電により電灯が消え、エレベーターも止まってしまう。
- ・水圧でドアが開かなくなることもあります。
- ・地下街では防火扉が停電により自動的に閉まってしまう場合もあります。

事前に防水板や土のうなどを用意しておく

- ・土のうなどで水をせき止めるのは有効です。初期の段階なら、二重にしたゴミ袋に半分程度水を入れた臨時の水のうなどで応急処置をするとういでしょう。

都市型水害はなぜ起きるか

昔、雨水は地下へのしみ込みが多く、田などに一時的にたまり、ゆっくり川に流れていきました。しかし現代は地表がアスファルトでおおわれ、雨水も下水道によって処理されています。

都市が集中豪雨に見舞われると、下水道施設の能力を上回る大量の雨水が短時間に流入し、市街地にあふれて洪水が起きるようになります。特に、地下街や地下室などの浸水に注意する必要があります。

流域雨量指数とは

流域雨量指数とは、河川流域で降った雨の量や流下する時間などを考慮し、対象区域における洪水の危険性を示したものです。

雨が降ると、河川には流域に降った雨が集められ、時間をかけて下流へと流れていきます。そのため、下流域で降った雨が少量でも、上流域に降った雨の量が多ければ洪水の危険性が高まる可能性があります。洪水の危険性が高まる時間は、流域の形状や降雨の様子によって変わります。

流域雨量指数は、これらを踏まえた指標として、洪水警報・注意報の発表基準に使用されています。

自宅地下室の階段には手すりをつけておく

- ・階段から流れ落ちる水の勢いは強いので、必ず手すりにつかまって上ります。

市町村の作成する洪水ハザードマップなどの防災情報を確認しておく

- ・市町村では洪水ハザードマップ等を作成し、大雨による洪水が発生した場合の浸水予想区域や、その深さなどを表示しています。マップを活用して自宅周辺の危険度を知り、避難場所や避難経路について確認しましょう。また、避難する際には、アンダーパスなど地形的に浸水しやすいところに近づかないようにしましょう。

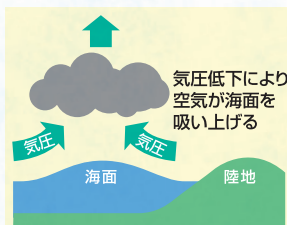
高潮災害とはどのような災害か

高潮災害は、台風の接近に伴って発生することが多く、海面が異常に上昇して起きる災害です。

特に海岸のゼロメートル地帯などは、高潮による浸水被害を被る危険性が高く、注意が必要です。

気圧低下による吸い上げ効果

台風は中心気圧が低いため、その部分の空気が海面を吸い上げるように作用し、海面が上昇します。(気圧が1hPa低くなると→海面は約1cm上昇)



風による吹き寄せ効果

台風による強風が沖から海岸に向かって吹くと、海水が海岸に吹き寄せられて海面が上昇します。



高潮災害

高潮災害に対する心得

日頃からの備え

- ・自宅や勤務地などの高潮危険度の把握
過去に被害がないかどうかを含めて把握しておきましょう。
- ・避難場所や避難経路の確認
自治体提供の防災情報をチェックし、避難場所や避難経路をあらかじめ確認しておきましょう。

危険を感じたら早めに避難を

- ・風雨の状況、自分や一緒に逃げる人の体力、避難時間などを考え、早めに避難しましょう。
- ・避難の際には、気象庁の発表する台風などの気象情報や、市町村が発令する避難情報などを入手するよう心がけましょう。